



昨日の陰鬱な空が嘘のような快晴であった。

湿度も低く、肌に触れる空気がサラサラと心地よい感触を伝えてくる。

天気の良い日はいつもそうしているように、加夏子は詩集を膝に、中庭の木陰へ車椅子を停めていつものように朗読を始めようとしていた。

そういえば…

ジュンと初めて会った日も、こんな気持ちのいい風が吹いていたっけ

たったの1週間。

それっぽっちの空白がひどくもどかしく、腹立たしくもあった。

一時帰宅って、ジュンの家には誰もいない筈じゃない、ひとりぼっちの家に帰って何があるっていうの？ ここならワタシだっているのに

理不尽な想いであるのは判っていた。

彼にだって家に、病院ではなく自分の家に帰りたいという気持ちがあっても当たり前だと頭ではわかっていた。

それでもジュンに会いたい…

会ってワタシの『声』を聞いてほしい…

話をしたい、いっぱい、ウンとイッパイ…

背後から草を踏む音がした時、彼女は何故か願いが聞き届けられたと思った。

ジュン！

車椅子のホイールを勢いよく回し、期待を込めて後ろを振り向いた。

膝の上から中原中也の詩集が落ちる。

「よう！ いい天気だな、嬢ちゃん」

笑いながら近付いてきたのは、いつもリハビリの訓練に付き添っている中年のトレーナーだった。

近くまで歩いてくると、彼は加夏子の足許に落ちた詩集を拾い、軽く叩いて土を落とした。

「中也か。若いのにずいぶん屈折した詩を読むんだな」

屈託なく話すその男が、皆から銀さんと呼ばれていた事を思い出した。

「『在りし日の歌』なら俺も読んだ事があるぜ。もっとも嬢ちゃんと違って、初めて読んだのは四十を過ぎてからだけだな」

かなしい心に夜が明けた

うれしい心に夜が明けた

野太い声が、ゆっくりと一編の詩を詠う。

加夏子がハッと表情を変えた。

その詩の題名は、

『青い瞳』

「嬢ちゃんが誰を待ってるか見当つくよ。俺達は軀を直す手伝いは出来るが、それ以外はからっきしだ。悔しいがアイツにゃ敵わん」

銀さんが指さす方を向くと、人影が一つ、陽炎に揺られながら近付いてきた。

「ヤァ」

1週間ぶりの、あたたかい笑顔がそこにあった。

◇

どうかしてしまったんじゃないかしら

自分でもそう思う程、次から次へと加夏子の頭の中には言葉が浮かんできた。

時間も経緯も脈絡もすっ飛ばして、止めようのない想いの洪水が溢れてくる。

ジュンが、チョット待ってよと苦笑しながら諭そうとしても、彼女の想いの『流れ』はまるで土石流並みであった。

「カナちゃん、もうチョットゆっくり話してよ、ちゃんと聞いているからさ」

「(ダメ！ ジュンが黙って家にもどっちゃったのが悪いんだからね！)」

ピシャリと言い放ち、加夏子はますます脈絡の無いエンドレスな話に没頭していった。

◇

薄く開いたドアの隙間から、二人の奇妙な会話を覗き見る者がいた。

「銀さん…どう？ あの二人。ワタシにはどう見ても、あのコ達がちゃんと意思の疎通をしているようには見えない。でもなにかしら、あの愉しそうな姿は」

恵美子の後ろでは、難しい顔をした銀さんが腕を組んで立っていた。

「フムウ〜…」

「ンもうっ！ さっきからそうやって唸ってばかりなんだから。おかしいとは思わないんですか？ 彼女、話せないんですよ。さっきから彼が一人で赤くなったり青くなったりしてるだけ。でも見て下さい、あんなに表情をコロコロ変えて… あんなに愉しそうに。初めて見た」

小声ではあったが、恵美子は興奮した口調を隠そうとしなかった。

「彼は絶対！ 彼女と直接コミュニケーションを取っています。この様子が何よりの証拠ですよ！」

「エミちゃん…」

「これが彼の『幸福の王子』である秘密なんですよ！ 彼さえ居れば、自閉症の子だって心を開けるかも知れない。治療法の無い人達にも希望が出てくるんじゃないかしら！ うまくいけば…」

「エミちゃん！」

銀さんが怖い顔で恵美子の両肩を掴んだ。

「あの坊やは俺達の道具なんかじゃない。あの子はな、ああやって誰に頼まれた訳でもないのに、毎日病室を回って、淋しそうなコ、哀しそうなコ、退屈で壊れてしまいそうなコの話聞いてやってるんだ。自分だって目が見えなくて世にな。俺達はずっと陰から見てる、坊やが手に負えなくなった時にはいつでも助けてやれるようにな」

どこか哀しそうな顔をした銀さんが言った。

「放っておいてやろうぜ、な？」

銀さんの言葉に、恵美子はそれ以上なにも言えなくなっていた。

◇

外出許可が出たのは、殉が病院に戻った翌週の事だった。

入院してから初めての外の世界…

加夏子はずっと拒否していた。

何故だか判らない、でもこの病院の外にはとてつもない怪物が待ち構えていて、一步でも門を出ればひとくちでワタシを頬張り、噛み砕き、骨も肉も無いグチャグチャの塊になるまで味わって、ゴクンと飲み込んでしまうに違いない

理由も無くそうだと確信していた。

ちがう

何かがひどく間違っている

そんな風に思えるようになったのは、ジュンと話すようになってからだと加夏子は思った。

自分では一度も世の中を視た事の無い彼の言葉。そこには『真実』があった。

まともに見開いているというだけの目には決して映る事の無い、ありきたりな、何処にでもある、でも絶対に偽りじゃない風景が目の前にあるかのようにありありと感じられるようになったのだ。

そして、決めた。

出てみよう、と。

「（…チョット、いってくる、ね…）」

病院の正門で迎えを待つ間、加夏子はずっと黙っていた。

『声』を出すのがひどくしんどかった。

「（ひと晩だけだから、すぐ帰ってくる。荷物だってそんなに持っていかないし）」

加夏子は車椅子の手摺を睨んで、うつむいたまま『話して』いた。

「言い訳してるみたいに聞こえるよ」

殉が笑いながら答えた。

「僕だってこの間は帰ってきたんだ。カナちゃんだって帰ってあげなきゃ。お父さんやお母さんも待ってる筈だよ」

「…」

「もしかして『この前は散々、一時帰宅したジュン君をなじっておいて今度は自分が帰っちゃったりしたら格好がつかない』、な～んて思っちゃったりしてるの？」

「…」

「ねえカナちゃ…」

「(そんなのじゃないっ!!)」

殉の言葉を覆い隠すように、加夏子の想いが『声』となってほと走った。

「(私… ワタシ怖い、どうしてだか知らないケド怖い! スゴく怖いっ!! 行きたくないっ!!!)」

車椅子から身を乗り出して殉にしがみ着いた。

「(やだヤダッ、やっぱりヤダァ!!…)」

幼な子のように怯える加夏子の背をさすりながら、殉は優しく囁いた。

「大丈夫。君には家族がいるから」

そして、近付いてくる白いクラウンに手を振ってみせた。

◇

エアコンが程良く効いた車内は快適だった。

加夏子は後部座席で身を反らせ、遠ざかる病院の建物をいつまでも見つめていた。

「カナちゃん、やっと病院の外に…ううん、家に帰ろうって気になってくれたのね。連絡があったとき私、すこし泣いちゃった」

助手席で加夏子の母、清水紗季子が白いハンカチを膝の上で握りしめながら呟きかけた。

品の良い藍色の和服が、小さな軀と小さな声を包んでいる。

「この一年、どれだけこの日を待ったか。ねえアナタ」

ハンドルを握る男は、彼女とは対照的に威丈夫の巨漢だった。

加夏子の父、清水恒彦はそのいかつい体軀からは想像出来ない優しく弾んだ声で言った。

「ああ、パパはなあ、もう嬉しくってウレシクって、昨日の夜なんかロクに眠れなかったんだぞ！　今夜はカナの大好きなカルボナーラだ、ママが腕によりをかけて作ってくれるからな！！」

後ろを振り向きはしなかったが、彼の声は喜びに満ち溢れていた。

加夏子はまだ後ろを向いたままだ。

「カナちゃん、ずっと病院の方を見てるのね。さっき見送りに来てくれてたコ、仲良しなの？　もしかしてボーイフレンドなのかしら？」

「よさないかサキ。カナだって年頃なんだ、ボーイフレンドの一人や二人いたって不思議じゃないだろ、ましてや長い病院生活だ、色々話したりする同い歳の友達だって出来るさ、ナァ」

前席で両親が話し続ける間、加夏子は一度も前を見ようとはしなかった。

まるでそこには誰も居ないかのように。

まるで世界で自分一人が呼吸してるかのように。

まるで…

蛇にいざなわれ、樂園を追われたイブのように。

それでも彼女の両親は話し続けた。

絶え間無く、途切れることなく。

やがて完全に病院が見えなくなると、加夏子は初めてゆっくりと前を向いた。

お喋りが止み、車内をしばし沈黙が包み込む。

……



二人を見る加夏子は静かに、静かに微笑んでいた。